

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19500881

研究課題名（和文） グローバル経済下におけるわが国周辺地域の肉用牛生産の成長と自立

研究課題名（英文） Globalization and Sustainable Development of Cattle Farming Areas in Peripheral Japan.

研究代表者

川久保 篤志（KAWAKUBO ATSUSHI）

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：50314612

研究代表者の専門分野：人文地理学

科研費の分科・細目：地理学・地理学

キーワード：グローバル化，牛肉輸入，国土周辺地域，肉用牛飼養，大規模化，自立的発展

1. 研究計画の概要

経済活動のグローバル化は、農牧業のような比較劣位産業には農産物輸入の急増という形でマイナスの影響を与え、近年は食料自給率の低下がより顕著になっている。しかし、農牧業が地域産業として重要な国土の「周辺地域」では、土地利用型の部門を中心にグローバル化へ対抗しながら、自立した産地の形成を目指す動きがみられる。本研究では、このような事例として南九州と北海道東部の畜産業（肉用牛）を取りあげ、(1)その成長の経緯と地域的要因、(2)今後の更なる発展を促すための条件、(3)必要な政策課題、などを明らかにすることを目的とした。

そのための具体的研究課題として掲げたのは、(1)経済活動のグローバル化に伴う牛肉輸入の量的・質的变化の実態解明、(2)牛肉輸入の拡大を主導した流通業者（商社・小売業者・外食産業）の行動・役割の実態解明、(3)わが国肉用牛産地の地域的特徴と自由化実施・BSE問題発生後の価格変動への地域的対応の実態解明、(4)わが国周辺地域の大規模肉用牛産地におけるグローバル化への対抗策と自立に向けた取組みの実態解明、の4点である。

2. 研究の進捗状況

2007年度は、経済のグローバル化に伴う日本の牛肉輸入の量的・質的变化を、輸入自由化（1991年～）とBSE問題による米国産牛肉の禁輸・制限（2003年～）という2つの契機に着目して実態解明を行った。その結果、自由化によって、①米国・豪州産を中心に輸入が急増したこと、②冷蔵での輸入割合が高まるなど高品質な牛肉需要が高まったこと、③米国産はバラ肉など特定部位の輸入が増加し

たこと、④豪州産は穀物肥育された牛肉輸入が増加したこと、などがもたらされたことが明らかになった。

また、自由化以降の国土周辺地域における肉用牛飼養の動きとしては、北海道・南九州とも規模拡大傾向にあることが明らかになった。しかし、酪農副産物としての乳用種肥育経営が中心の北海道では、肉質的に輸入牛肉との競合が激しく、酪農の不振とも相まって経営は不安定で、現在でも政策的な価格補填制度に依存していることも明らかになった。

2008～2009年度には、米国産牛肉の禁輸・制限による牛肉価格高騰と国産需要の高まりという経済環境の好転の中で、国内肉用牛産地は回復・再生のきっかけを得たのかについて考察した。その結果、程度に差はあるものの、全国的に肉用牛の飼養頭数は増加に転じたことが明らかになった。そこで、このような回復傾向の強い産地として南九州の宮崎県・鹿児島県に注目し、中でも繁殖牛の飼養頭数の伸びが大きい宮崎県の高千穂町・南郷町（現・日南市）において現地調査を行った。

その結果、小規模な高齢農家の離農は継続しているものの、それを上回るペースで農業後継者のいる農家が大規模化を進めており、その動きを和牛相場の上昇と行政の補助事業（畜舎増築）が後押ししていることが明らかになった。また、規模拡大に際して隘路となる粗飼料の調達については、町内外の農家から水田を借りるなど農地の流動化が行政・農協を挙げて推進され、成果をあげていることも明らかになった。

一方、北海道の乳用種肥育経営においては、と畜・解体後の枝肉価格が和牛ほど上昇しなかったことと、輸入依存度が高い濃厚飼料

の価格が世界的な穀物価格高騰（2007年～2008年）によって急騰したこと等から、2003年以降に経営収支が改善された期間は極めて短かったことが予備調査を通じて明らかになった。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

理由は、2009年度は研究分担者として参加している科研（基盤研究（B）課題番号：19320134，研究代表者：荒木一視）の最終年に当たっており、年度後半はこちらの取りまとめを重点的に行ったため。

4. 今後の研究の推進方策

2009年度までに行った南九州の2地域での調査の成果は、1つは投稿中の学会誌で受理（掲載許可）され、もう1つは2010年5月に学会報告する予定である。本研究課題では北海道東部での調査も予定しているが、本年度は昨年度に行った予備調査を活かして、夏期に再度現地を訪れて本格的な調査を行う予定である。残された時間は多くはないが、北海道東部での畜産研究の経験がある研究者から助言を仰ぎながら調査をスムーズに進め、かつ学会発表を通じて批評を受けながら完成度を高めるつもりである。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ①川久保篤志：宮崎県高千穂町における肉用牛産地の成長と持続的発展への課題－2000年代初頭の和牛価格高騰期に注目して－、地理科学 65 卷（掲載許可），2010年，査読有り

〔学会発表〕（計1件）

- ①川久保篤志：近年の和牛価格高騰下における南九州肉用牛産地の成長と持続的発展への課題，経済地理学会西南支部例会，2009年3月7日，熊本学園大学